



# 奥多摩遭難マップとその検証

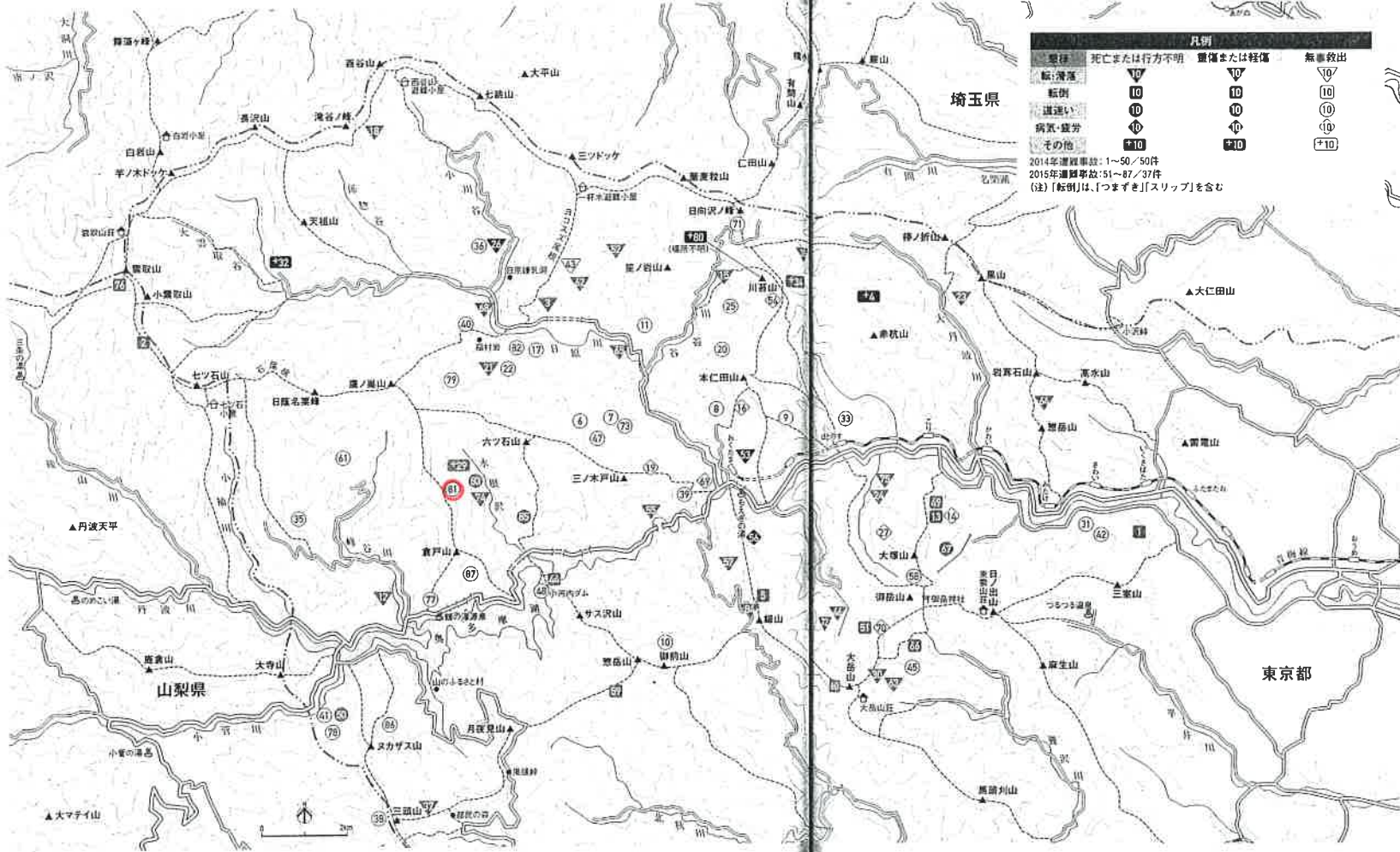
## 多発している下山時の道迷い

昨年秋季以降、数回にわたり青梅警察署奥多摩交番を訪問し、14・15年に発生した山岳遭難について取材させていただいた。ここでは、その概要を報告し、いくつかの事例も紹介する。奥多摩で最も多発し、警戒が必要なのは道迷い遭難である。

著者 青梅警察署奥多摩交番 野村仁文・作図

凡例			
遭難	死亡または行方不明	重傷または軽傷	無事救出
転・滑落	10	10	10
転倒	10	10	10
道迷い	10	10	10
病気・疲労	10	10	10
その他	20	20	10

2014年遭難事故: 1-50 / 50件  
2015年遭難事故: 51-87 / 37件  
(注)「転倒」は、「つまずき」「スリップ」を含む



## 東

東京都では14年に108件(134人)、15年に135件(155人)

の山岳遭難が発生しているが、そのほとんどは、高尾山を含む奥多摩エリアで起こったものである。奥多摩を管轄する警察署は、青梅署、五日市署、高尾署があり、それぞれ山岳救助隊が設置されている。今回は、奥多摩の最も広いエリアを管轄している青梅警察署の奥多摩交番取材した。管轄地域は多摩川本流・奥多摩湖と、日原川の両岸に広がる山々である。

この地域では14年に50件(71人)、15年に37件(43人)の遭難が発生した。遭難の種類は「道迷い」が最も多く、約41%を占めている。奥多摩は低山のわりには地形が険しいため、転・滑落事故も比較的多いのが特徴である。そのなかには、道迷い中に滑落しているケースが一定数含まれる。以上のことから、奥多摩で最も注意すべき遭難は「道迷い」、その次に「転・滑落」といえる。

上の地図は、14・15年に発生した遭難事例の発生場所を記録したものである。ただし、「道迷い」については発生場所ではなく、遭難者が最終的に救出(または収容)された場所を記録した。道迷い遭難は、当事者がどのように迷ったか把握していないため、発生場所

がわからないことも多い。

その他の態様、「転・滑落」「転倒」「病気・疲労」などは、それぞれの遭難発生場所を記録している。この遭難マップに見られる特徴として、次の点が挙げられる。

- ① 遭難が多い  
年間40〜50件の遭難が、日帰り圏内の狭いエリアに集中して起っている。全体を見渡して、いたるところで遭難が起っているという印象がある。
- ② 一般ルートから外れた場所での遭難が多い  
一般登山道での遭難事故は少なく、ルートから外れた場所にポイントが多い。「道迷い」は当然ではあるが「転・滑落」でも、ルートから外れた場所で見られるものが多い。
- ③ 「道迷い」は救出場所がある程度集中している  
「道迷い」(○)記号は、2〜3件が集まったり、近い場所に並んでいるものが多い。同じような場所でも道迷い遭難が繰り返されていることがわかる。
- ④ 「転・滑落」は集中していない  
「転・滑落」(▽)記号は、広範囲に散らばっている。特別な難所ではないものの、ちょっとしたミスで転・滑落事故になってしまう危険箇所が、広い範囲に存在することがわかる。



部を負傷した。  
幸い携帯電話が通じたため、Bさんは自分で通報ができた。事故発生は15時45分ごろ、通報は15時47分だった。

〔接証〕

道迷い遭難を防ぐには、迷ったことに早く気づいて、すぐに引き返すことが重要である。  
Bさんが林道終点(林道合流点)を見逃したのには不注意というほかに、通過してから、道迷いに気づくのが遅かった。先へ進めば進むほど、戻るのは心理的にも相当難しくなってしまう。

作業道が途切れたように見える場所から、実は右折して小中沢へ下りられる踏み跡があったという。Bさんはその踏み跡を見落として尾根通しに直進したあげく、誤って滑落している。道に迷った人は、なぜか戻れなくなるケースが多い。Bさんもそうだった。

〔事例No.73〕

支尾根に入り、沢へ迷い込む

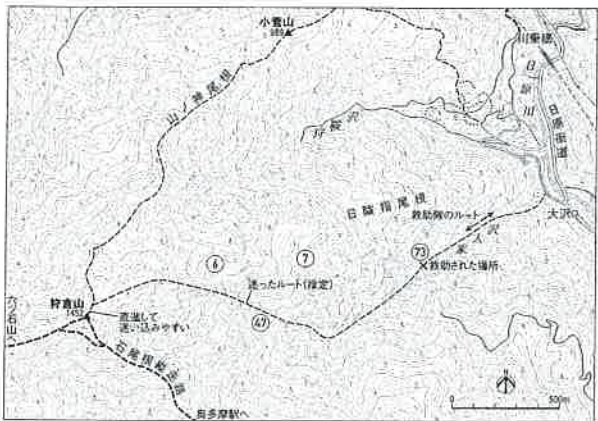
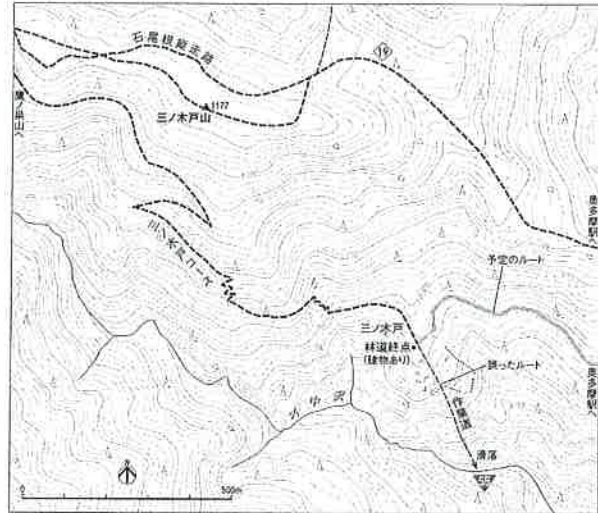
男性Cさん(31歳)は、9月13日9時ごろ、東目原から稲村岩尾根へ入山した。11時50分、鷹ノ巣山に到着し、10分ほど休憩して、12時ごろ石尾根を奥多摩駅方向へ下山開始した。  
14時ごろ六ツ石山分岐を通過するが、以後はルートがわからなく

なり、約2時間、山中を迷いながら下り続け、最後には沢に沿って下った。16時、完全な道迷い状態となり、自力では脱出できないと考えた。携帯電話が通じたため、16時12分、Cさんは110番通報して救助を求めた。

救助隊は上下の2方向から家人沢に向かい、下からの隊が、18時15分、遭難現場に到着した。Cさんは歩ける状態だったため、隊員が介添えしながら沢を下降した。

〔接証〕

Cさんの迷ったライン(救助隊推定)は、図中に記載したとおりである。



狩倉山付近の登山道は、稜線上を行くものと、稜線南側を行くものの、2コースになっている。稜線上の道から狩倉山に登った場合、頂上で右折して南東方向に下らないと石尾根ルートには行けない。頂上で直進すると、山ノ神尾根に入ってしまう。

この尾根にも踏み跡がついているが、初めに屈曲して迷い

すい。Cさんは山ノ神尾根に入らず、すぐに正面の幅の広い支尾根に引き込まれ、それから東寄りにルートを下って下ったため、最後には家人沢に下りた。  
沢に出てからはそれほど長くは下っておらず、沢での移動距離は600mぐらいと推定される。沢を強引に下ろうとしないで救助要請したのは、生き延びるためによい判断だった。

〔事例No.74〕

道迷いから滑落、翌日救助

女性Dさん(56歳)は娘(21歳)と2人で、9月13日9時ごろ、東目原から鷹ノ巣山へ入山した。  
登頂後、12時15分以下山開始し、鷹ノ木尾根を倉戸山方向へ向かった。14時ごろにはルートが誤ったというように続いている。Dさんはそのまま下り続け、尾根末端近くで急斜面を沢に約10m滑落して胸を負傷した。発生時刻は不明。目が昏れ、携帯電話はつながらず、2人は身動きできないまま一夜を過ごした。

翌朝5時、救助を求めるために娘一人で尾根を登り返し、携帯電話

通じる所まで来て8時に事故を通報した。10時34分、救助隊が現地へ到着して合流。11時33分、消防ヘリが二人を吊り上げ収容し、病院へ搬送した。

〔接証〕

鷹ノ木尾根は道迷い遭難が多い。15年は本事例と似たような場所でのNo.81、No.83の事例も発生している。

Dさんの迷ったライン(救助隊推定)は単純で、シンナシの頭を過ぎて、標高1280m付近から東の支尾根へ入り込んだ。あとは支尾根を末端近くまで下り、Dさんは誤って沢へ滑落した。支尾根へ入ってしまった理由は、現地調査をしないとわからない。



この付近はニホンジカが多く、林内の下草が食い尽くされて裸地化した所に、けもの道が縦横についている。そのひとつに引き込まれたのではないだろうか。

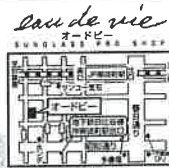
この親子は山慣れている、迷ったときは引き返すことも知っていたようだ。Dさんが滑落しなければ、尾根を登り返していたらろう。滑落したのは沢に近い急斜面だが、特別に滑落の危険を感じたような場所ではないとのこと。

なお、No.81、No.83の事例は、どちらも作業用のビンクテープに誘われて支尾根に迷い込んだ。途中で道迷いに気づいて引き返さうとしたが、正規ルートに戻る事ができずに救助要請している。

登山用サンクラス

度付/度無し/遠近両用もできます

1000本の在庫からお選びいただけます。  
有名クライマーのサポート実績。  
山好きのオーナー、スタッフがアドバイス致します。



オードビー 検索

オリジナル Z-4  
コーゲル構造で紫外線をカット  
東京都台東区上野5-13-11  
TEL03-5818-5090  
AM11:00-PM7:00  
毎週火曜・第3水曜定休